

受け継がれてきたまちの宝、笠鉾

◆笠鉾のはじまり◆

笠鉾が妙見祭に出るようになったのは江戸時代の天和・貞享頃（1681～1687）と言われていす。最初は簡素であったものが次第に豪華なものになっていったようです。

松井家文書には、笠鉾菊慈童の移り変わりが記されています。それによると、「宝永年中御家司松井牛右衛門殿、後長慶と云奇進之華蓋長柄傘之如ク花を出し、老人にて荷神輿ニ随ヒ参候、今以其通也、其頃宮之町より出し候も同し事にて、大ふりに致傘を緋縮緬にて張、上ニ唐団扇、中ニ宮町之文字を居、下ニへうたん有之、ツヒキあけまきを以飾、老人持也、長慶老奇進之品と前後ニ参申候」とあり、右図のように傘の上に飾りのついたものを1人で持っていたのが最初の姿のようです。

その後、元文3年（1738）に他の笠鉾のように二重の笠に菊慈童の飾りのついた4人持ちのものになったことがわかっています。

豪華な飾りのついた笠鉾は、いわば“風流化されたまちの印”なのです。様々な工芸技術が集約された笠鉾はまさに妙見祭の華といえます。



笠鉾菊慈童初期の姿
(推定図)

◆笠鉾の構造◆

笠鉾の外見は建物ようですが、中を見ると笠鉾を支える柱は中央の柱1本だけです。

その柱の先端に飾りがつき、その下に上笠があります。欄間や水引幕などの部材は、上笠から下がっているのです。上の推定図と比較すると、

- ①笠鉾の柱が推定図の人が持っている柄の部分
- ②松の飾りが傘の上の扇子と瓢箪の部分
- ③上笠の部分が緋縮緬を張った傘の部分

にそれぞれ相当し、“傘”自体が大型化して豪華な飾りがつき、“笠鉾”になっていったことがよくわかります。

◆組立ては無形の文化財◆

笠鉾は祭りの数日前に組み立てられます。笠鉾1基につき部品の数は約200～300個あり、普段は種類ごとに箱に入られて町で保管されています。

それぞれの部品は、順番どおりに組み立てていかないと、部品が入らないようになっています。組立ての技術も長年にわたって受け継がれてきた貴重な無形の文化財なのです。

●笠鉾は曳くもの？

笠鉾にタイヤがついたのは昭和20～30年代にかけてです。それまでは8人で担いでいました。往復約12kmの道のりを担いでいくのは大変な重労働でした。

笠鉾松にタイヤがついたのは昭和38年（1963）。
(写真はそれ以前の様子)

(麦島勝氏撮影)



◆笠鉾の飾り◆

笠鉾には、謡曲に題材を求めたものや、美しい花や動物などの飾りが多く見られ、どれも不老長寿や商売繁盛への願いがこめられています。



「菊慈童」・人形
経文の書かれた菊の葉の露を飲んで不老不死の仙人になった少年。



「本蝶蕪」・青貝細工の伊達板 文化7年（1810）制作

青貝細工は、薄く研ぎだした貝の裏から彩色し、型を抜いて漆器に貼り付けていく技法で、長崎青貝細工や長崎漆器ともいわれるように長崎で作られていました。この伊達板は、制作年のわかる青貝細工の作品の中で最古のものとして注目されています。

◆笠鉾の記録◆

部材に残る墨書は、笠鉾の修理や改造、関った人たちを教えてくれる貴重な記録です。



「蜜柑」の蛇腹の裏に記された宝暦3年（1753）の改修のときの記録です。どのような人たちが関ったかを知ることができます。



「恵比須」の波の裏には、明和元年（1764）に八代紺屋町の太工、三平次が14歳の時に作ったと記されています。

◆甦った部材◆

平成6年から11年に行われた修復作業で、本来の姿を取り戻した部材も多くあります。



「西王母」の獅子

修復前



現れた元の彩色

西王母の獅子の表面の金箔をはがすと元は彩色されていたことがわかりました。



修復後

●見ごたえ十分、豪華な水引幕。裏にはこんな秘密が……

金糸で亀が囀鳴された豪華な水引幕。これは、約100年前の明治32年（1899）に作られたものです。裏には様々な赤い糸で補修した跡が見え、たくさんの人たちが笠鉾をまちの宝として大切に受け継いできたことがわかります。



水引幕の裏
赤い糸で、外れてきた表の金糸を幕に縫いとめています。



「蘇鉄」・黒紋織子地蔵に波瑞亀模様緋縮水引幕